



寺報 ともしび

金剛山大長寺

令和二年一月一日発行

第十号

今日一日に思いをいたして

住職 安藤 康哉

一休さんは「門松は冥土の道の一里塚、めでたくもありめでたくもなし」と申されました。明日ともしびぬ今日のいのちを悔いなく正しく生きていかなければなりません。ところが今の世相はどうでしょうか。

毎日のように人のいのちを簡単に殺傷する事件が頻発し、いのちを単なる物として取り扱う殺伐な時代になってしまいました。まさに人類未曾有の危機に直面し青息吐息の苦悩に喘いでいるのではないか。私は今の政治家や官僚にお願いしたい。

今こそ神仏の慈悲の心に目覚めて実直にこの現実と向き合ってほしいと、国破れて山河ありと言うのではないか、なんとしても日本の将来に確かな光明を輝かして欲しいと一介の庶民の立場から雄叫びをあげ続けています。

さて今年もお正月を迎えることが出来たことを特別の感慨をもって有り難いことだと思っております。檀信徒の皆さま方にはますますご健祥ご発展の年でありますこと心から祝祷いたしています。終りに一句
仏の慈悲にいだかれて 露のいのちの人の身も

よき種まきでとこしえに 花のまことを咲せなん



令和元年師走の住職、公務の合い間に潮音寺で

人生は、冥土の旅

副住職 安藤 道隆

「門松は 冥土の旅の一里塚 めでたくもあり めでたくもなし」

この句は、とんちで有名な「一休さん」、室町時代の禅僧で一休宗純が読んだと言われている。

当時、「一休さん」は、新年を迎えた中、道端で 骸骨をつけた杖をつき「ご用心、ご用心」と言いながら歩き回ったそうでありませぬ。

新年早々、縁起が悪いと思われるかもしれませんが、そこには、避けては通れぬ一つの真実があるのです。新年を家族、愛しい人と迎え、食事をし

たり、初詣に出かけたりすることは、誠に有難いことでありませぬ。中には、体調を崩し病院で過ごされる方もいらっしゃるでしょう。いずれにせよ、自分という存在が新しい年を迎えられるという

ことには、「めでたい」ことではあることは、言うまでもありません。一方で、私が今生の世で生きている時間が短くなるという

ことを示しています。誰もが、健康で変わらぬ命を切望しておりますが、万人平等、必ず、この世を離れる時が訪れます。現在、世界で最高齢の方が、116歳の日本人の女性です。少なくとも、大半の方が、

1394年2月1日～1481年12月12日

それ以上は、この世に存在することはできないのです。

マラソンで例えますと、私たちはゴールに向かって毎日走っているのです。新年を迎えるということは、すなわち、限られた人生が短くなるということです。これを「めでたくも

一休宗純（一休さん）
一三九四年～一四八一年



紙本淡彩一休和尚像（重文）
出生地は京都。幼名は千菊丸。戒名は宗純。一休は道号。
(Wikipediaから引用)

なし」と詠んでいるのでありませぬ。

本当に見つめるべき「自分のいのち」を向き合い、今をしっかりと生きていかなければ、あつという間に人生が終わってしまいます。よという戒めでもあります。しっかりと生きるといことは、ご両親や祖父母からいただいた「いのち」に感謝し恩に報いるということ。むしろ、感謝せざるおえないということでしょうか。

しかし、私たちは、日ごろの雑踏の中で、我欲やむさぼりに、心を奪われながら生きていくことが多いようです。限りある人生を自覚すればこそ、様々な執着から離れていくこともできると思います。毎日感謝の気持ちですごせればどんなに素晴らしい人生を感じられるでしょうか。

そんな一年にしたいものであります。

特別志納者の紹介

岡本太郎の藝術と仏教

院代 安藤嘉則

「芸術は爆発だ」と語った岡本太郎は、大阪万博の太陽の塔や壁画「明日の神話」など、多くの大作を残しました。岡本は十八歳で渡仏し、孤独の中で自分の生命が何に向かっていているか、悩みに悩みます。そして、ソルボンヌ大学哲学の精神分析の講義でフロイトを読み、「生の本能」「死の本能」という語に出会ったとき電気ショックを受けたようになったそうです。その時のことを次のように回想しています。

そうだ。生きるとは、生の本能だけではないのだ。・「死の本能」が私の全人間の底で、強烈に引く張るからこそ、生命の歓喜が燃え上がるのだ。本能といえど当然、自己保存の欲求、持続、つまりプラスの方向への

盲目的な意志と考えられるのに、それを断ち切ろうとする、ストップをかけようとする「死の本能」なんて、一見逆説のように考えられるが、それこそ正しい。・私はいつでも断ち切る。いや、今この瞬間瞬間「死」を足の下にふみしめている。・それは陰気なメソメソした気分ではなく、エネルギーの爆発なのだ。（岡本太郎「赤色が象徴する「生」と「死」より」）

岡本太郎が「生」の中に「死」を踏みしめている感覚を命全体で受け止められたからこそ、その新たな芸術的世界が創出されたといえるでしょう。それが岡本氏にとって生命そのものの色であり、生と死を象徴する赤の色彩表現だったのです

この「今この瞬間瞬間「死」

を足の下にふみしめている」という言葉は、仏教と無縁ではありません。むしろ『般若心経』の「色即是空」で知られる「空」の思想そのものです。「空」とはゼロのこと。刻一刻と変化す

岡本太郎デザインの
「太陽の塔」高さ約七十m



「気まぐれ花★旅日記」

(二〇一八年)

—web freeimageから引用—

る私の「いのち」はゼロ（空）であると考えます。

心臓が血流を流し、肺は呼吸し、心は思考し感情に揺れ、とにかく一瞬たりとも私たちは同じ状態ではありません。私たちは今この一瞬を生きています。昨日の自分はどこにもなく、明日の自分もどこにもありません。何億もの金を積んでも昨日の自分に戻れず、いわば昨日の自分は死んだのです。にもかかわらず、今はどこにもない過去（いわば自分の心に刻まれている思い出）に引きずられ、それがトラウマとなって、今の自分を支配しています。

岡本太郎の「それはメソメソした気分ではなく、エネルギーの爆発なのだ」という言葉は、まさに「死」を強烈に意識することによって生まれた言葉であり、仏教でいえば「空」・ゼロなる私的存在を自覚することではないでしょうか。

ご逝去の方々と命日

仏教講座のご案内

- 一月十九日（日）
- 二月十六日（日）
- 三月十五日（日）

月一回のお話。身近な生活の中に
いきる仏様、坐禅、さとりとはいきり。
時間 毎回十五時から約一時間
場所 大長寺本堂吉田島ホール
講師 院代 安藤嘉則
お気軽に参加下さい

ともしび

寺に関連する冊子を繰っていたら「ともしび」の言葉が飛び込んできた。四十一年前に神奈川県知事が提唱された「ともしび運動」は今では末端まで広がっている。

その目的は地域住民が手とり合い助け合って、心豊かで潤いのある心情を養い、住み良く生きがいのある郷土環境をつくることだそう。

またその名づけは、一本のローソクはすぐに消えてなくなるが、灯に灯をつけ足していけば、尽きることなく広がって太陽のように明るくこの世を照らすという意味からだと言います。

私たち一人一人は真に自己に目覚めて内に秘める灯（愛・慈悲）を互いにつけ続ければ、地域社会を国中を照らすことが出来る。この世は極楽浄土と化すだろう。それには、自分の幸は他人の幸なくして絶対的なものはないと結んでいる。

（大森昭禅著「とも生きのよろこび」から）

小紙「ともしび」は発行十号。命名親の諸星さんは長年の大長寺活動の中で編み出された。絶やさず灯しつづけて皆の心を照らし地域を明るくしたいもの。（二〇一七年一月初号、寺報通算二〇一号）

